

狼たちへの伝言3
栄光への
ポール・ポジション
落合信彦

狼たちへの伝言³
栄光への
ポール・ポジション
落合信彦

●著者
落合 信彦

狼たちへの伝言③ 栄光へのポール・ポジション

1991年8月1日 初版第1刷発行

© Nobuhiko Ochiai 1991

著者 落合 信彦
出版者 相賀 徹夫
発行所 小 学 館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2-3-1
電話 編集 東京 (03) 3230-5525
業務 〃 (03) 3230-5333
販売 〃 (03) 3230-5739
振替 東京8-200番

印刷所 凸版印刷株式会社

Printed in Japan

ISBN4-09-380343-9

- 造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。
- 本書の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは著作者および出版者の権利の侵害となりますので、あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

はじめに

『狼たちへの伝言』を世に出して3年。

それに続くPART2を出したのが、その1年後。

幸いにも多くの読者の好評を博し、感動と激励の手紙も受け取った。

ある読者は一念発起し、それまでの怠惰な生活を捨て、血へドまみれの生活にあえて身を投じ、そして、またある読者は希望を胸に、勇躍海外へ飛び出していった。

オレは、今さらながらに活字の力の強さを噛みしめている。ジャーナリストになって良かったと、改めて感じているのだ。

だが、その一方で不安も禁じ得ない。

オレのいうことを金科玉条のごとく考え、オレの猿真似をし、同じことをすればオレのようになれると勘違いしている若者も多く見受けられるからだ。

オレは「教祖」ではないし、キミらも「信者」ではない。

オレにいわれたことを鵜呑みにして、何も考えないのでは、胡散臭い新興宗教に入信する頭の弱い連中と変わらない。そんなバカ者になつてほしくないから、オレは書いているのだ。

3年前、オレは「世界はちつとも平和じゃない」といった。それは、今も同じだ。

一時は世界が喝采した東欧の民主化が、民族独立の動きの中で血に染まり始め、凱旋將軍のように拍手を浴びていたゴルバチョフ・ソ連大統領も「ワラの男」になりはてた。

何もかもが、激動の渦中にある。

自分の頭で考え、自分で自分なりの答えを出せない男では、とてもじゃないが生き抜けない。

そんな過酷な時代なのだ。

だから、オレはまたペンを取った。

キミたち若者は今、「冬の時代」にいる。来るべき春の陽光を浴びるため、凍土の中で耐える種子だ。これから、ひと花もふた花も咲かせることができるのだ。

そのためには努力しろ。実力をつける。生命を賭けろ！

死のギリギリの縁で勝負するF1レーサーたちは、ポール・ポジションを獲ることに生命を賭ける。栄光のチェッカー・フラッグを受けるまでの一過程として、予選にも力をそぐのだ。

人生も同じだ。

キミたちが、芽吹く前の種子ならば、ここで予選落ちしてはいけない。懸命に戦ってポール・

ポジションを獲ることだ。

オレは、そのためにヒントを与える刺激剤にすぎない。後押しなんかはしてやらない。自分で走れ。

恋愛、仕事、勉強……どんなことにもポール・ポジションはうんとあるのだ。

*

アイルトン・セナという男がいる。キミたちもよく承知のF1チャンピオンだ。

セナはモナコの街を時速200キロ・メートルという風のような速さで駆け抜ける。できるだけ速く走るために、カーブではコース外側の壁からギリギリ2センチ・メートルの所まで車体を寄せる。時速200キロで2センチの間隔……。なんとというテクニック。なんとという度胸。

しかし、彼はそれでは満足しない。それどころか、さらにあと1センチも壁に近づけることを目標にしているという。そうすることで、フィニッシュの時点で後続車に3キロ・メートルも差をつけることができるのだ。

この生命を賭けた、ギリギリの挑戦とその積み重ねが勝利に結びつく。セナほどの男でも努力を怠らない。必死なのだ。

だからこそセナは輝いている。

しかし、日本の若者は、セナの生き方となんとかけ離れていることか。

小学生、ヘタをすれば幼児のころから塾へ通わされ、お決まりの受験生生活。社会に出れば出

たで、くだらぬ出世競争とくる。

楽しみはいえ、ガツガツ食うことと、金をためること、惰眠をむさぼること。

F1どころかカートだって動かせはしないだろう。

金や名誉や地位。そんなくだらぬ虚飾は、こちらから捨てて、並いる強豪をブツちぎって、ゴールインできる人生のチャンピオンを目指してほしい。

それには真剣勝負をすることだ。キミの一生は一度しかない。しかも、今という時は二度と戻らないのだ。

一瞬一瞬を必死に生き、短くとも強烈な人生を歩め。それこそが若者の幸福というものだ。オレのメッセージを批判してもいい。いや、むしろ「オレの意見は違う」といえる男になれ！この本で、若者の少しでも多くが、『狼』の道を歩いてくれば、それがオレの喜びだ。

一九九一年、夏

落合 信彦

目次

1 「戦争をしたい人間はいない」などというおめでたいメンタリテイが生み出す安っぽい平和主義が、日本を世界から孤立させる。

9

2 酒を絶ち、女を絶ち、タバコを絶つて百歳まで生きるバカよりは、戦いに生き、死んでいった傭兵たちのほうがよほど輝いている！

23

3 人を殺し、破壊以外に生み出すことのない傭兵に憧れるより、ビジネスマンとして耐えるほうが遙かに男らしい。

33

4 罪なき人々を冷酷に踏みつけるのが歴史ならば、積みあげられた人間の情熱に込められるのも歴史だ。

47

5 不可能も力が結集すれば可能になる。東欧の自由化で目のあたりにした事実を『世界で最も抑圧された民衆』日本人も再認識すべきだ。

6 ベルリンの壁を築いたのも人間、壊したのも人間。人間の可能性を否定する前に、変革の情熱を持て！

7 ニッポンの繁栄はガラスの城にすぎない。この崩壊の危機を救えるのは、不確かな未来さえも愛せる若者しかない。

8 日本という精神的ぬるま湯につかていては、心にこびりついた贅肉は削ぎ落とせない！！

9 物に不自由しても、物に使われる家畜になり下がって生きるよりは、夢を追って生きる大きなバカになれ！

10 国際情勢を読めない商人の発想では、世界戦略に長けたアメリカ財閥のワナにはまる！

11 戦後44年、歴代総理のほとんどが地方出身者だった。いまこそ都会型政治家が必要だ。

12

人生のクライマックスも見ないうちから、簡単に会社をやめる男には、女を愛する資格もない！

131

13

冒険とは生命を賭けた挑戦。リスクを背負う覚悟も実力もなしにする冒険は、ただ無謀というものだ！

145

14

命をかけた恋愛を一度でもしたか？『金』や『モノ』でしか女を口説けない男には女を抱く資格はない！

161

15

他人の迷惑も考えず、ヘタな歌を大声で歌うカラオケ・メンタリテイが人も国も腐らせている！

175

16

遊びも、プレゼントも、女でさえもインスタント札讀する男では、インスタントな人生しか送れない。

187

17

『スランプ』『ストレス』を軽々しく口にするな！とことんドン底まで落ちて、一度『心の血』を流してみろ！

197

18

一人の人生はあまりにも短い！何の生産性もない休みをとるくらいなら、一瞬一瞬を真剣に生きてみる！

211

裝丁／中山
銀士

「戦争をしたい人間はいない」などというおめでたい
メンタリテイが生み出す安っぽい平和主義が、日本を
世界から孤立させる。

狼からの手紙

オレは感激しやすいのだが、最近、特に感激したことがある。

ある読者から手紙がきた。その男は元やくざだったという。素直な字で次のようなことが書いてあった。

へ1年前、先生の本に出会えてからというもの、それらは私の内面に大きく影響し、私の人生を大きく変えてくれました。

それらは私の血を沸かせ、肉を躍らせ、睡眠不足に落とし入れたうえに、殴りつけ、そして大きな世界があることを教え、夢と希望を与えてくれました。

昨年の6月末、私はそれまでの人間関係といっさいの収入源を捨て、やくざから足を洗いました。

——中略——

「自分を追い込み、血を流すことを恐れるな。血の小便をし、ヘドを吐くことをためらうな」

この文を何度も涙して読みかえし、勇気づけられた私は、肉体労働を始めました。

——中略——

先生によって、人を傷つけて生きることのむなしさ、人を感動させて生きることのすばらしさを知った今、私の中で愛する人が増えつつある今、昔の生活に帰ろうなどとはまったく思わない



……

物書き冥利に尽きるとは、まさにこのことだ。

同時にオレは思った。この男は本当の勇氣を持っていると。長年どつぷりとつかってきたぬるま湯から飛び出して、人生を180度変えるのはなまやさしいことじゃないし、彼のこれからの人生は決して甘くはない。いろいろな障害にぶつかるだろうし、挫折にも遭うだろう。

だが、こいつなら生き残れるという感じを、オレは彼の文面から感じ取った。

それにしても、オレは改めて活字の力の凄さを感じさせられた。こんなに人の生き方に影響を与えられるんだから。

これが、オレがまた今回『狼たちへの伝言』を出し、再びキミたちに語りかけようと思った理由だ。

世界の情勢は、『狼たちへの伝言』PART1、2のところとは大きく変わってしまった。

ところが、ノー天気な日本人は、そのことになんの対応もできないでいる。ソ連・東欧にしろ、中東にしろ、さらに新たな火種を抱え始めているのだ。

オレは、そのところから、キミたちに警告をしておきたい。

さて、世界激変の第一の出来事はなんといっても最初は、湾岸戦争だった。

もう一度、この戦争を基本の部分から見直してみたい。

1990年8月2日、イラクは、まずクウェートに侵攻した。オレは、これはサダム・フセイン

ンの大きなミス・カリキュレーションだったと思う。

仮に、フセインがこのとき、クウェートより先にサウジに侵攻し、その後、クウェートや湾岸諸国をも取っていたらどうなっていたか。

世界の原油の確定埋蔵量の26パーセントはサウジにある。そしてイラクとクウェートが10パーセントずつ。これで50パーセント。これにアラブ首長国、カタール、オマーンなどの湾岸諸国の分を入れると、なんと世界の原油の確定埋蔵量の70パーセントを、サダム・フセインが握ることになっていたかもしれないのだ。

そうなれば、世界はフセインの思い通りになっていただろう。

そうでなくても、フセイン人気には凄いものがあつた。

あのとき、多国籍軍側に参加していたモロッコやエジプトでさえ、指導者はともかく、底辺の民衆は、決して「反フセイン」ではなかった。むしろ、アメリカに抵抗して戦っているフセインを英雄視さえしていたのだ。

だから、戦争が長引けば長引くほど、フセイン人気は高まり、アラブの中でのモテる国とモテない国との亀裂も深まっただろう。

幸いなことに、戦闘は比較的短期間でケリがついた。あれだけ、威勢が良かったフセインも影をひそめている。

しかし、安心するのはまだ早い。

先ほどオレは、「戦闘」が終わったとはいったが、「戦争」が終わったとはいっていない。まず、アラブとイスラエルの対立関係が解消されたわけではない。

そして、もう一つ怖いのが、第2、第3のフセインの登場だ。

湾岸戦争で、アメリカは大量の兵器を投入し、アメリカ製兵器の優秀さを世界中にアピールした。そして、戦争直後、アメリカはサウジや湾岸諸国との間で180億ドルにおよぶ武器セールスの商談を成立させるのに成功。この先、特にサウジは軍拡路線を突っ走り、れっきとした軍事大国になり上がるだろうが、こんな国の王子たちのうちにフセインのような危険な男が出現しないとは限らないのだ。

ライバル、サダム・フセインの力が落ちたことで、もうひとりの独裁者、シリアのアサド大統領あたりが、中東の盟主の座につこうとする可能性だってある。

そういう意味でも、アラブはこれまで以上に「世界の火薬庫」になる可能性が高い。

ところが、ノー天気な日本人には、そんなこともわかっていない。湾岸戦争が終わったことで、世界に平和が戻ったと喜んでいる。おめでたいかぎりだとは思わないか。

オレたちは今、激動する世界の中にいるのだ。戦争の前も後も、同じメンタリティーとは、いつたい、戦争から何を学んだというのか。

戦争中の報道でもあきれてることがあった。

米国ではあのととき、フセイン暗殺のオプシオンが、報道番組やジャーナリストの間で、避けら